

十七歳の青少年たちの一世紀  
—*Mit 17--- Das Jahrhundert der Jugend*—

鎌野 多美子\* 訳

**Translation: At 17 ... A Century of Youth**

Tamiko Kamano \*

**Introduction**

This paper is a translation of the document *Mit 17... Das Jahrhundert der Jugend*. The “*Deutsche Welle*” officially published the document on the Internet in June 2014 because that year was the hundredth anniversary of the beginning of World War I. One hundred years of German and European history from 1914 to 2014 are covered in six episodes. Each episode explains about a generation and how important milestones in German and European history influenced the youth of that time: 1914 *An Eager March into World War I*, 1945 *Youth in Ruins*, 1961 *The Building of the Berlin Wall, The Pill*, 1968 *A Time of Dreams and Protests*, 1989 *A Generation in Jeans and Leather Jackets Finds Freedom* and 2014 *Unidentified, Connected, Insecure - A generation in search of itself*.

**はじめに**

第一次世界大戦勃発から百年目にあたる二〇一四年に、若者たちが自らの企画でかれらの側から先の世紀を追体験した成果を、ドイッチェ・ヴェレは六月二六日付でネット上に公開した。DVDも出ている。短編映画とでも言えようか、企画者たちは、当時十七歳だった人びと、二つの大戦を生き延びた人びと、強制収容所から生還したユダヤ人たちというように、時代の証言者たちから、生の声を収録している。原語はドイツ語だが、英語版も公開されている。音や写真や映像を通して語られている一世紀である。

政治的断面からでも、軍事的断面からでもなく、その都度の十七歳という青少年たち、若い世代が当時どのように戦争を体験したか、かれらの運命と、その後のドイツが、それによってどう変化していったかの断面あるいは断層からの歴史探訪といえようか。同世代の現在の若者たちが、過去の、かれらと同じ若者たちの運命を追体験することで、過ぎし百年を自分のものとして把握しようとしている。『十七歳の青少年たちの一世紀』というタイトルをもって、先の世紀の運命と行動を、ネット利用時間が最も多い、利用最大層の若

\*かまの たみこ：大阪国際大学現代社会学部教授〈2015.9.25受理〉

い世代に向けて公開している。そこを評価したい。

いま日本にはキナ臭い雰囲気の流れつつあり、学ぶところは大きいので、ドイッチェ・ヴェレの公開作品を、できるかぎり忠実に紹介しよう。

時代の区切りは一九一四・一九四五・一九六一・一九六八・一九八九・二〇一四年である。第一次世界大戦勃発の一九一四年、それがあとをひきずった第二次世界大戦勃発の一九四五年、冷戦の始まりを告げるベルリンの壁の構築・避妊薬の台頭・マッシュルームカット台頭の一九六一年、若者たちのプロテスト・ベトナム戦争・ヒッピー族台頭と自由恋愛に象徴される「願望とプロテストの時代」の一九六八年、ジーンズと革ジャン着用の若者たちが「平和と自由の時代をつかむ」一九八九年、そして百年目の二〇一四年を「匿名・ネット化・不安定化の時代」として、切り目を入れている。前の世紀の、かれらの追体験の成果を以下に翻訳しよう。

## 一 企画の概要

この号外的な企画では、私たちは一九一四年から今日までの一世紀を歩き続けます。そしてその際——男性の目、女性の目で——ドイツ史の道路標識を見ます。この企画を説明しましょう。

このプロジェクトの成功には、男女を含めて七人の執筆、一二人の生涯、五〇時間にわたる素材研究、そして三六五日にわたる作業の連続がある。それによってアイデアは実現された。

十七歳の青少年たちを中心にして、過去という百年の大木を、縦でなく、横に切って、できた断面をみるために、いくつものスライスを観察するために、企画者当人の私たちはみずから、青少年たちの役を演じている兵士たちと一緒に、登場人物たちが青少年だった時代のいくつもの場所を、ドイツとヨーロッパの歴史の・戦争の舞台を——ベルギーのイェーベル<sup>Ypern</sup>からベルリンの壁に至るまで——旅した。当時を追体験するために、役を演じている兵士たち（俳優男女）と一緒に森林の中を進軍した。追体験、それがこの作品の長所である。この企画のために、地下室に眠っていた古い写真の入った幾つものカバンを持ち出し、それらの写真を資料とした。それ以外にも貴重な公文書はヨーロッパ史料集から入手した。この企画と調査を支援したのは「ベルリン壁財団<sup>2</sup>」である。

短編映画の集合体のようなこの作品は、組込まれている短編映画のすべてが音楽で始まっているが、それは企画者当人の私たち青年が「青春」とはどのような音がするのだろうか、一九一四年から二〇一四年までの、自分たちと同年代の十七歳の若者たちがどんな歌を聴いていたのか知りたかったがためである。私たちの一人は自分で歌い、他の者は古いレコードやカセットを聴いた。インタビューに応じた八九歳のユダヤ人女性エステル・ベヤラーノ<sup>3</sup>はアウシュヴィッツ絶滅収容所での生き残り人物だが、協力的に私たちの前で当時のようにアコーデンを弾いてくれた。

第一次世界大戦で戦場となったベルギーのフランダース・フィールズ<sup>Flanders Fields</sup><sup>4</sup>では、私たちは第一次大戦の塹壕を匍匐前進することによって当時を追体験した。マグデブルガー・ベルデ地域<sup>Magdeburger Börde</sup><sup>5</sup>では、イラン—アフガニスタン国境を越えてのDDRからの逃走を追体験した。

Kaiserswerth<sup>6</sup>のディアコニはエルザス地方の野戦病院に変化した。

## 二 一九一四年：万歳をあげて戦争へ

一九一四年に始まる戦争に勇んで出かけた若者たちは愛国心と理想主義に燃えていた。戦争の悲惨など知る由もない、だから“万歳”の声をあげて意気揚々と出かけていった。名誉心と義務に駆られ出征したほとんどの人は、戦争は短期間で終わる、出征は彼らにとって榮譽の冒険であろうと期待して出ていった。しかしまもなく、彼らは、現実はその甘くないことを、経験から学ばなければならなかった。

塹壕の中で、また砲弾が点在する泥の中で、何千人もの男子たちが死んでいった。十分な訓練を受けていない、一度も武器を手にしたことのないような経験浅い上司のもとで、彼らは砲弾や毒ガスまた病気に倒れ、死んでいった。

第二次フランダース戦のイーペルで軍医として任務に携わっていたジョン・マクレア<sup>7</sup> (1872-1918) 自身も彼らと同じ運命だった。この地で一九一八年一月二三日に肺炎にかかり五日後に死亡した。フランスのブローニュに近いウイムローに埋葬された。その翌年、彼の詩集『*In Flanders Fields and Other Poems* フランダースの野にとそれ以外の詩』が出版された。

年若く体もまだ小さかった新米兵たちは、軍事訓練と、兵士としての服従時代だったので直立不動で立ち続けなければならなかった。少女たちは早くから家事手伝いをしなければならなかった。そういう時代である。百年前の青少年たちの日常生活の上には暗雲が漂っていた。そして戦争はやってきた。

かれらは愛国心もち、政府を信頼していた。そして宗教心をもっていた。反抗して騒ぎを起こすことや、試してみるということは、当時の若者たちには許されていなかった。一方でひとは成熟するのが早かった。とはいえ、法的には二歳で初めて成人とされた。それどころか、政治的には二五歳をもってはじめて成人である。その数は住民男子の半分のにぼる。女性に選挙権はなかった。

労働者家庭の子は早くも一二歳や一三歳で毎日十時間までは、家族を養うために働かなければならなかった。多くの少女たちは女中として働かされた。そのばあい雇用人からセクシュアル・ハラスメントを受けた少女たちも数多くいた。裕福家庭の子女は早くから結婚の準備をしていた。小学校を上がってすぐに、彼女らは全寮制の学校に入り、そこで礼儀作法や家政を学んだ。自分の職業をもつことへの努力は、望まれていなかった。二十世紀初頭の時代とは、そういう時代だった。

### ・自己発見する世代

しかし、青少年たちの多くは服従を望まなかった。かれらは自立をしはじめた。一九一三年のベルリン学校新聞では以下のように書かれている：わたしたちは私たちの両親に間違った同情をもつことはできない。私たちはかれらを甘やかし過ぎてきた。

その頃には相反するふたつの潮流——富裕層と非富裕層の青少年たち——が存在した。ベルリン-ステューグリッツのギムナジウムでは一八九五年に「ワンダーフォーゲル」が

設立された。自然の中を歩き回るよろこび、若者の一つの運動である。彼らの多くは裕福家庭の出身だった。自由な空の下で料理をし、ねむり、大きな声でフォルクスリートを歌い、ギターを弾くという、世界へ出ていこうとした男子たちである。多い時にはワンダーフォーゲル会員は約一万人いた。

官僚国家はワンダーフォーゲルの存在と会員たちを、革命的な動きはワンダーフォーゲルからは生じないという理由で認めた。しかし労働者団体の青少年たちは反対の評価を受けた。彼らが抑圧された理由は、彼らは思想的に政治上の敵である労働組合に、また SPD に近かったためである。

#### ・戦争への憧憬と不安の狭間で

ドイツ帝国は経済的、科学的、そして軍事的に、世界的影響力をもつ強国になろうとする最中だった。とはいうものの、政治的、社会的発展はあとからついてくる。プロイセンに刻印された身分制国家の先頭には皇帝ヴィルヘルム二世が立っていた。貴族は行政と軍事において重要ポストを占めていた。重要ポストに就けるのは、当時は出自が決め手だった。努力によって上昇しようとする市民階級はそのような伝統的構造に、労働者階級と同じように疑問を抱いた。

しかし、出自や年齢に関係なく、差し迫りつつある戦争の影は、すべての人たちの上に漂っていた。多くの人びとは戦争に憧れた。新兵器をためそうとする軍隊は戦争を求めた。また国家主義者たちと帝国主義者たちも戦争を望んだ。かれらは彼らの見解によれば世界的強国の中でドイツに相応しい地位を求めた。当時頻繁に引用された「<sup>Platz an der Sonne</sup>日の当たる場所<sup>8</sup>」をドイツのために手に入れようとした。

#### ・局地的紛争から全世界的破局へ

六月二八日にひとりのセルビア人がオーストリア皇太子フランツ・フェルディナントと彼の妻を暗殺した。このセルビアとオーストリア・ハンガリーとのあいだの局地的紛争は世界的な危機に拡大する。当時のヨーロッパの大国すべてが、その潮流にのみ込まれた。最悪だったのは、軍人たち——ドイツの国だけでなく——が、戦争は短い、クリスマスには家に戻っているだろうと、誤った推論に乗ってしまったことである。彼ら全員が機関銃、大砲、戦車という新兵器の殺傷能力を過小評価したのである。結果は陣地戦、物量戦、毒ガスだった。第一次世界大戦は人類史上初めての工業化された戦争である。一地域の紛争が、四年間も続き、一七〇〇万人が死亡するという世界戦争になった。

#### ・戦争への世代

国家主義的な考えの報道機関とドイツ政府は、サラエボでの暗殺行為の後、国家主義的雰囲気をもたらし、ドイツは脅かされている、敵に取り囲まれている、攻撃は一番の防衛であるというふう国民を煽った。一九一四年八月四日に皇帝はベルリンでの帝国会議において演説しているが、その中で「*Ich kenne keine Parteien mehr, ich kenne nur Deutsche* 私は政党にもはや関心はない、ドイツ人のみに関心がある」と言っている。国家

と軍隊における国民的で保守的なエリートは、全ドイツ人が肩を組み合わせ、団結することに、国民あげての力に頼っていた。もたらされた結果は、中級階層と上級階層の子供たちが、ドイツ人の結束を敵たちに見せることに憧れたことである。彼らは次々と自由志願をし、万歳をあげながら戦争に出ていった。

また女性や少女たちも前線にでていった。ドイツだけで一〇万人から一二万人の戦争看護婦が自由志願をした。彼女らのうち二万五〇〇〇人は出動時に、いわゆる兵站基地において戦争体験をしている。戦争に直結した前線と故郷との間での地において、彼女らは戦争の迫真を共に体験している。

自由の理想をすべて無視して、ワンダーフォーゲルの若者たちも群れをなして戦争へと自由志願した。それとは反対に、多くの労働者階級の子供たちは戦争に拒否的だった。それは、かれらの戦争ではなく、上の人たちの戦争だった。「Nieder mit dem Krieg. 戦争を打倒せよ<sup>9</sup>」の標語の下に、一九一四年六月に一〇万のドイツ人若者たちは街路に出て抗議した。しかしそれ以降、反戦デモは禁止された。

#### ・戦線で成人年齢到達

戦争に憧憬する酔いは前線の地ですぐにさめた。若い男子たちは—— 一部はまだ子供だった—— 自分たちは砲火の餌食であるだけだ、ということを知った。この戦争では戦争への自由志願はもはや時代にならなかつたのである。必要とされたのは、技術的に教育された経験豊かな兵士だった。

自由志願者のうち犠牲者数は、ワンダーフォーゲルでは四人にひとり、ドイツ人学生では五人にひとりである。しかし戦争を生きて乗り越えた者でも体に重い傷を受けている。二人にひとりの兵士は負傷した。多くの者は最悪の負傷を受けた。日記や写真からしか分からないが、精神的打撃は数えきれない。とりわけ、ドイツ人兵士が故郷にあてた二八〇億<sup>28 Milliarden</sup>以上の軍事郵便での手紙が心の傷を物語っている。

### 三 一九四五年：廃墟の中での青少年期

降伏後、多くのドイツ人は瓦礫の山を片付け、ヒトラーの十二年間を忘れようとした。降伏直前に、十七歳の若者たちは「最後の動員」として戦争に駆りだされた。

一九四五年の初めに二つの前線部隊からなる連合軍がドイツに到達したが、それに対して、アドルフ・ヒトラーは何もできなかった。彼ができたのは、四月三〇日の総統地下壕での自殺だった。しかしドイツ軍は赤軍がベルリンに進行してきて初めて降伏した。ヨーロッパにおける第二次世界大戦は五月八日に終わった。

しかし、敗戦国ドイツだけが瓦礫の山にあったのでは決してない。その戦争は数百万の死者を出した。ほぼ七〇〇万のドイツ人がこの戦争で命を失った。文民の半分以上の数である。英国は四三万の戦死者を悼まなければならなかつた。ソ連では兵士と文民あわせて二〇〇〇万人が死んだ。

六〇〇万人以上のユダヤ人を、国家社会主義者たちは大量虐殺した。それはこれまでの時代の中で最大規模のジェノサイド、一民族を撲滅しようとする大量殺戮だった。



・若者自身が若者の指導

敗戦、そして、それからのちに有名な「ゼロの時間」はやってくる。ドイツの多くの若者たちにとって世界は崩れ落ちた。彼らはナチ政権下で育った。小さい頃から十二年間(1933-1945)ヒトラーの人間軽視の思想に影響されている。そして戦争末期の数週間・数か月、もう一度戦争に送られた。ヒトラーが首相になった十二年前に繰り返し刻み込まれたことのすべて——反ユダヤからドイツの“究極の勝利”まで——は、大ウソだったと判明した。

ヒトラーの政権掌握直後に“<sup>H i t l e r j u g e n d</sup>ヒトラーユーゲント”のみが許可された青少年組織となった。やがて第二次世界大戦勃発の数か月前<sup>10</sup>にはヒトラーユーゲントに加入することが義務づけられた。ユダヤ人やジプシーやロマのように蔑視されないために、ほとんどのドイツ人の若者たちはそれ以降会員になった。ヒトラーユーゲントは年齢と性別によって分けられた。ドイツ人少年団とドイツ人少女団は一〇歳から一四歳の子どもたちで組織されていた。詳細にはヒトラーユーゲント HJ は少年だけ、ドイツ少女団 BDM (Bund Deutscher Mädel)<sup>11</sup> は少女だけだった。両方とも一四歳から一八歳の少年・少女が会員だった。

ヒトラーユーゲントの提供する企画は、大人の厳しい規則から離れて、同じような年頃の子供たちとの山登り、歌を歌うこと、体操すること等で、興味のそそるものだった。“<sup>J u g e n d f ü h r t J u g e n d</sup>青少年が青少年を指導する”というのが、ヒトラーユーゲントの謳い文句だった。そのようにして早い時期から若い指導者が育成された。少女は母親になる準備をしなければならなかった。未来の兵士たちは直立不動で立っていることと服従することを学んだ。野外での団体競技や国防(強化)スポーツでは——一九四五年まではまだ明確に——彼らは他国へ進駐する練習をしていた。学校においても、若い人びとはもはや自立した考え方や、自立した行動をするための教育は授からなかった。そうではなく“その指導者(ヒトラー)への”献身と盲目的服従のために教育された。

・青春の自由は不可能

ユダヤ人生徒たちはヒトラーの政権掌握以降、教師やクラス仲間からの敵対心を感じていた。かれらは一九三八年以降、ユダヤ人学校に行くことだけが許可された。ユダヤ人組織は、いわゆる「<sup>J u g e n d - A l i j a</sup>ユーゲント-アリーア<sup>12</sup>」と「<sup>H a c h c h a r a h - G e m e i n s c h a f t e n</sup>ハッハシャラー-ゲマインシャフテン<sup>13</sup>」を経由して、若者たちを、安全確保のために特にパレスチナへ向けて出国させる準備を試みた。けれどもその試み(逃避)は、時間的に間に合ったわずかな人にしか成功しなかった。一九四一年秋、ユダヤ人住民を組織的にゲットーに抑留することが始まった。強制収容所と絶滅収容所へ。

国家主義者たちの厳しいコントロールを潜り抜けることができた自由な青少年はまずはいなかった。青春の自由は不可能だった。一九四〇年初頭以降、一八歳以下の少年少女には夕方以降の外出は禁止になった。衣服規定が存在した。少年たちは短髪、ヒトラーユーゲント・ユニフォーム、少女たちはドイツのおさげ髪で、化粧はしてはならなかった。規定遵守は、五万人ほどのヒトラーユーゲントがドイツ中でとりおこなった。彼らはパトロールをして服装を監視し、髪が長すぎればそれを短く切ったり、化粧している少女の顔に唾

を吐いたりした。

### ・若者たちの抵抗

とはいえ、ヒトラーユーゲントに抵抗する若者たちもいることはいた。ハンブルクではスイング・ジャズのダンスの夕べでおちあい、アメリカ人の真似をして髪にポマードを塗ったりしていた「スウィングユーゲント<sup>14</sup>」が存在した。この若者たちは裕福家庭の子どもで、一六歳になっても強制的に半ズボンをはかされることに抵抗し、英国紳士を真似、ジャケットにネクタイ・コート、そして中折れ帽を被っていた。ヒトラーユーゲントとの喧嘩に発展することもあった。そのために彼らの生命は脅かされた。一九四〇年の秋に六四歳のスイング・ファンが逮捕された。逮捕時に一八歳以上である者は前線に送られた。

ラインラントでの若い抵抗者たちはエーデルワイスを上衣の折り返し(ラペル)につけていたので、すぐに「エーデルワイス海賊団<sup>15</sup>」として知られた。これはヒトラーユーゲント内の厳しい統制生活に対抗した若者たちの自然発生的な運動としてドイツ西部で一九三九年に発生した。主に十代の若者たち(14~18歳)で構成されていた。当時のドイツでは少年たちは一四歳で学校を卒業した後、ヒトラーユーゲントに入隊、十七歳でドイツ国家労働奉仕団に入り、兵役に就くことになっていたが、このグループの若者たちはこれを避けようとしていた。彼らはサイクリングをし、ギターを奏で、知っているヒトラーユーゲント歌を、歌詞を変えて愚弄したりした。それによって、一四歳から一七歳までの少年たちはゲシュタポによって拷問にかけられ、強制収容所へ追放されるという危険にさらされていた。

一時期みずからも HJ と BDM にいた、けれどもそこで人間軽視の政権に加担している事実を知ったハンス・ショルとゾフィ・ショル兄妹のように例外的な人物もいる。かれらは戦時中にミュンヘン大学でピラをまき、学生たちに注意を喚起しようとした。が、用務員に見つかり、ゲシュタポによって一九四三年二月二日に「ハンス・ショル、ゾフィ・ショル、クリストフ・プロプスト」<sup>16</sup>は逮捕された。三人ともギロチンで処刑、ナチスに殺害された。かれらの行為は、今日では白バラ抵抗運動として知られている非暴力主義の反ナチ運動である。

### ・子ども兵士

ドイツ人青少年たちの多くは国家社会主義者たちによる洗脳を恐れていた。防衛のために成人男子が足りなくなった時、成人男子たちはすでに前線に就いているか、死んでいるかのどちらかだったので、青少年たちが補填しなければならなかった。一九四三年、第三帝国の新しい青少年指導者アルトゥール・アクスマン<sup>17</sup>はドイツ人青少年の参戦を宣言し、十七歳以下の生徒たちを戦争に送った。

彼らの多くはいわゆる「高射砲隊補助<sup>F l a k h e l f e r</sup>」として対空防衛に組み込まれた。一九四五年までに約二〇万人の少年たちが空軍補助と海軍補助に投入された。一九四四年五月には平均年齢は十六歳七カ月だった。

また少女たちも戦争にかり出された。大部分は「故郷の前線」<sup>Heimatfront</sup>に。彼女らは古着を集めたり、クリスマスのためにセーターやソックスを編んだりした、また収穫の補助として田畑を耕作した。一九四五年には一六歳から二六歳までの五〇万人の女性たちがクリスマスの補助人として組み込まれた。彼女らの三分の二は自由志願者だった。

#### ・新しい生活

一九四五年五月八日、ドイツ降伏の時間がやってくる。そしてついに平和がやってきた。青少年たちにとっては未だかつて経験したことのない事態である。かれらの多くは子供として或は青年として戦争を体験していたので、トラウマを負った者も決して少なくない。前線での参戦・ドイツ諸都市での空爆戦争・父や母のいない防空壕での不安・がれきの中でのきょうだい探し、という経験から、かれらの多くはトラウマを背負った。戦争降伏後の数週間あるいは数カ月間に、かれらの多くは暴力を受けている。概算では、二〇〇万人のドイツ人と、それを少し上回る数百万人の女性が暴行を受けている。

しかし、ドイツでは「ゼロの時間」は新しい始まりと言われる。新しい時代のシンボルは、戦争でできた瓦礫の山を片付ける女性たちである。“すべてを忘れる”ということはそう簡単なことではないということを、今日の研究が示している。戦争当時少年だった世代が、今日なおどんなに深くトラウマをひきずっているか、それらの研究が証明している。また多くの人たちは、自分たちの子供にトラウマを伝えている。

ケルン市のナチ資料センター<sup>18</sup>にある録音テープ「それは上海だった」<sup>Es war in Schanghai</sup>は、かつてのエーデルワイス海賊団のジーン・ユーリッヒ<sup>19</sup>が歌っている。彼は二〇一一年に故郷のケルン市で死亡、生前、反極右主義を貫き通した。

#### 四 一九六一年：壁の構築と安全世界、ピレとマッシュルームカット

一九六一年は壁構築の年であり、ドイツ市場にピレが出てきた年でもある。またハンブルク・クラブに、イギリスから、音楽史上大スターの四人組が登場した。そういう時代である。

「だれにも壁を構築する計画はない*Niemand hat die Absicht, eine Mauer zu errichten*」と、DDR 国家評議会議長ヴァルター・ウルブリヒト<sup>20</sup>は一九六一年六月一五日に言っている。それから二か月もたたない深夜一時に、土木作業員たちは西側に続く道路の上に有刺鉄線を張りめぐらした。それは一九六一年八月一三日の出来事だった。ドイツ人にとって運命の日である。ベルリンの壁はそれから二十八年間、東側と西側を分断した。

#### ・壁は家族を分断

ベルリン人はショックを受けた。ベルリンのど真ん中に「強制収容所の遮断壁」<sup>die Sperrwand eines Konzentrationslagers</sup>が張りめぐらされた、と、壁構築の同日に議事堂前で当時のベルリン市長、のちの連邦宰相ヴィリイ・ブラントは言っている。丁度一〇三一五日間ベルリンの壁は冷戦の象徴として、また世界を、敵対するふたつの——西の資本主義体制と東の共産主義——地域に分断する象徴として存在した。二五〇人以上の人間が、その壁を越えようとして死んだ。とくに



一九六一年にDDRから抜け出ようとしたのは若者たちだった。当時西側に行こうとした若者たちの二人にひとりには二五歳以下だった。

### ・経済奇跡

一九六一年に十七歳のドイツ人は、一九四四年生まれということになる。かれらは爆撃で破損した都市や田舎で、住んでいた住居から追い出された人びとの中で、或は難民たちの中で生まれていることになる。多くは赤子として腹を空かしたにちがいない。また父親を知らない子どもたちも多くいるにちがいない。しかし、この暗い時世を、かれらの両親たちは思い出したくなかった。

さてしかし今は出発の時期だった。DDRでは計画経済のもと全労働力——女性の労働力も含む——が使われる。また連邦共和国では経済奇跡が開花した。西では男性が経済的に稼ぎ手で家族を養っていた。また男性は冷蔵庫や洗濯機のある持ち家だけでなく、テントを張って寝泊まりするキャンピング休暇であっても、イタリアでの休暇を家族に提供できることに喜びを感じていた。当時流行した三「K」は女性の仕事を要約している。それは「Kinder こども」「Küche 台所」「Kirche 教会」である。失業者はそれまでなかったほど厚遇された、会社は贈物を提供して新入社員の求人募集をした。壁構築は大抵の人はラジオ、テレビ、新聞で知った。つまり大方の家庭ではテレビやラジオがあり、新聞を取っていた。また人びとはユーリィ・ガガーリン<sup>21</sup>が宇宙にいった最初の人物ということも、アイヒマン裁判も新聞を読んで知った。ホロコーストに大きく関与したかつてのドイツ親衛隊中佐アドルフ・アイヒマン<sup>22</sup>は裁判に立たされ、ホロコースト責任者の一人として死刑判決を受けた。彼の供述は「命令を遂行しただけ」ということだった。これは各家庭の夕食時の話題になった。

家族は夕食後に白黒テレビの前に集まり、一チャンネルしかなかったが探偵ものや、フランクフルトの出版社一家の日常茶飯事を扱った「フィルマ・ヘッセルバッハ<sup>23</sup>」のような番組を見ていた。

### ・流行歌、ペチコート、「リプシー」

この、わが家への隠通・マイホーム主義は多くの若者たちには非常に退屈だった。かれらは活発に生きたかった、生きているという実感をもちたかった。若者たちの欲求を満たすには、アメリカ合衆国から五〇年代後半にやってきた野性的で騒々しい音楽が適していた。エルビスプレスリーのセクシーさに少女たちは気絶をした。ロックンロール・ファンは「不良少年」といわれた。かれらはジーンズや革ジャンには気乗りがしなかった。

「ドイツ人エルビスと呼ばれたペーター・クラウス<sup>24</sup>」がプレスリーの歌をドイツ語で歌ったのは、当時の西ドイツでは英語を理解できる人は少なかったためである。ドイツ人が理解できるように、少しだけ英語を交え、プレスリーの曲を歌った。青少年向けの雑誌「Bravo プラヴォー」が出した“ペーター・クラウスのスター像”はポスターとして「バックフィッシュ」たちのベッドの上に掛けられた。当時「バックフィッシュ」<sup>25</sup>と呼ばれていた少女たちはとくにソフィア・ローレン<sup>26</sup>や、オードリー・ヘプバーン<sup>27</sup>やペーター・ア

レキシサンダー<sup>28</sup>に熱狂した。あるいは一九六一年のトップ歌謡曲「船がくるでしょう」<sup>29</sup>を歌ったカテリナ・ヴァレンテ<sup>30</sup>に熱狂した。

DDRではロックンロールは無作法という理由で禁止された。そのほかにも、資本主義のアメリカ合衆国から音楽が伝播した。チューリンゲン州のズールではそのために多くの若者たちが投獄された。社会主義の若者たちはロックンロールのためにつくられた二人一組のダンス「リップシー<sup>31</sup>」に熱中した。

西でも東でもダンス教師は厳しかったので、若者たちは礼儀正しく少女の手をもちながら、スーツに身をこなし、少女は少女でベチコート（スカート）を着こなし、互いにあまり近寄らずに東ドイツでも西ドイツでも踊っていた。

しかし、慎み深い時代は過ぎ去ろうとしていた。すでに当時ハンブルクでクラブ通いをしてきた人たちは先を見ていた。リヴァプール出身の四人は音を立てて踊りながらロックンロールというタイトルのついた歌をもってグロセ・フライハイト六十四番地の「インドラ・クラブ」に登場した。彼らを知る者は当時まだほとんどいなかったが、まもなく世界中の少年少女たちは彼らに夢中になった。一九六二年の夏に「私を愛して Love me do」で未曾有の成功物語をスタートさせたビートルズである。ビートルズの時代がやってきた。

#### ・愛は猥褻行為

六〇年代の始まりは、ドイツ社会はボイラーのようだった。爆発は数年後になる。興味は抑圧され、愛は決しておおびらにはできなかった。手を握ることが感情の最大表現だった。自慰・ホモセックス、夫婦外セックスは「<sup>u</sup> <sup>n</sup> <sup>z</sup> <sup>u</sup> <sup>c</sup> <sup>h</sup> <sup>i</sup>」と評価された。そして一部は罪になった。一九六一年六月一日に「避妊薬」が市場に出てきた。それは第一には既婚女性のために処方されるものだった。しかし避妊薬はセックスの自由化、また相手をしばしば変えることにつながると懸念された。それに失望した数十万人の妊婦たちはピレ出現以前のように、違法であっても「墮胎を請け負う闇産婆 Engelmacherinnen」に墮胎してもらった。愛に生きる者にはただ一つ、結婚あるのみ。とくにDDRでは二〇歳で結婚する人が多かった。結婚すれば新居が早く手に入った。

ふたつのドイツ国家の若者たちを、一九六一年にはまだ窮屈な社会制約が締め付けていた。しかし地平線には変化が浮かび上がっていた。変化は髪型にあらわれた。一九六一年の十七歳たちは、まさに変化のど真ん中にいた。

### 五 一九六八年：願望と抗議の時代

一九六八年という年は「願望と抗議」<sup>Träume und Proteste</sup>というスローガンの時代だった。それは、若者たちの抗議・ベトナム戦争・ヒッピーと自由恋愛を、象徴している。若い世代がかれの両親に向けた「あなた方はヒトラー下で何をしたのか」の問いでもある。

ベトナム戦争に対する世界的なデモ抗議、マルチン・ルーサー・キング牧師<sup>32</sup>暗殺、ブラハの春の残虐な終結、ドイツ人学生指導者ルディ・ドゥチュケ<sup>33</sup>への発砲、フランスでの何週間ものゼネストというように、これらはすべて動乱の一九六八年に起きている。とりわけ裕福な西側諸国の固い組織に反抗して騒ぎを起こす若者たちは、決定への参加（共

同決定)と社会参加を要求した。そして新しい価値を探した。それは富や消費より以上のものであらなければならない。

### ・裕福、抗議、そして発砲

西ドイツでは、人びとはそれまでになく豊かに暮らせていた、経済は開花した。失業者はほとんどいなくなった。そして労働力の需要を補うために「ガストアルバイター」(外国人労働者)が経済的に弱い地域から募集された。イタリア、スペイン、ポルトガル、ユーゴスラヴィアやトルコというように。将来的にドイツの顔をいっしょにつくる人たちである。

連邦共和国では不穏な状態は、大学生だったベンノ・オーネズルク<sup>34</sup>が六月二日にベルシア国王に抗議するデモの最中に警察官に射殺された一九六七年に早くも始まった。ベンノの死亡三日後ミュンヘン大学の学生たちはデモを起こした。死亡の事情は長い期間説明されなかったので、デモはだんだん拡大していった、警察は厳しくそれに対抗した、そしてマスコミ(とくにシュプリングャー・コンツェルン<sup>35</sup>の諸新聞)は不当に、主としてデモする人びとを暴力的と描写した。

一九六八年四月に学生指導者ルディ・ドゥチュケが暗殺計画で重傷を負わされた時、そして五月末にCDU/CSUとSPDの連立政府が危機事態において治安維持を確保する人々に平時より以上に権力を容認する「非常事態の法律 Notstandsgesetze」を可決した時、デモはクライマックスに達した。APO(Der Außer Parlamentarischen Opposition 議会外反対派)における活動家たちは連邦共和国における独裁的な右翼化を懸念した。

DDR 政権には、西ドイツでのデモはまさに正当だと映った。ベンノ・オーネズルクの死は連邦共和国の「faschistoidischer Charakterファッショ的な性格」のあらわれとして宣伝的に利用された。しかしDDRにおいても、若者たちは、かれらの自由を厳しく削減する国家に対して用心深く反抗していた。かれらは選択できることを欲した。職業、住む場所、友人、音楽などを自由に選択できることを欲した。社会主義的なFDJ(Freie Deutsche Jugend 自由ドイツ青年団)に一方的に押しつけられることを嫌った。チェコスロヴァキアでの「人間的な顔をもつ、世の中に対して開かれた社会主義」の試みをロシアの戦車が踏みじったとき、それについては、大部分の人は同意していなかった。もっともDDRでのプロテストは、たとえば歌の歌詞のなかで仄めかすというように、緻密になしとげられた。

### ・教授のガウンの下には千年来のかび

伝統的な大学運営への抗議である「タラール(大学教授のガウン)の下には千年来のかび」というスローガンはドイツの学生運動の標語になる。

一九六八年の若者たちのプロテストは世界的現象だったが、ドイツ連邦共和国におけるプロテストには特別な背景があった。一年前の一九六七年に、社会を激しく揺さぶった本が出版されていた。精神分析学者アレクサンダー・ミッチャーリヒ Alexander Mitscherlich(1908-1982)とマルガレーテ・ミッチャーリヒ Margarete Mitscherlich(1917-2012)による『追悼には無能力 Die Unfähigkeit zu trauern』という本である。ふたりはその中で政

治的犯罪への個人の罪を、国家社会主義を例としてしらべている。ふたりはヒトラーと彼の指導チームにだけ罪を負わせているドイツ人たちに全く心がないことと、ナチス犯罪に対して羞恥心のないことを明らかにしている。共同責任の立場にドイツ人たちは立っていない。一冊の論難書をもって、ドイツでは国家社会主義の分析が公に始まった、ナチが終わって二十年以上も経ってからである。いまや子供たちは両親のことを知ろうと思っている：ヒトラーの下であなたたちは何をしたのか。

なぜなら DDR とは違って、行政と警察、医師と司法という連邦ドイツでの多くの役職には、未だにかつてのナチ党員が就いていた。また大学においても、大学の権威主義的な組織はほとんど変わっていなかった。教授や講師たちは自分たちの中で会議をひらいた、学生たちの同意は考慮に入られていなかった。しかし、今や学生たちはまさにそれを要求したのである。「大学教授のガウンの下には一千年來のカビ」というスローガンは抗議の箴言となった。

#### ・未来へのカラーフラッシュ

一九六一年と一九六八年の間にはわずか七年しか存在しない。が、その七年間に森羅万象が存在した。あたかもだれかが電灯のスイッチを入れたかのようにだった。突然すべてがカラーテレビのようだった。一九六七年八月二五日に副首相ヴィリー・ブランドがスイッチを入れ、カラーテレビ開始は始まった。一九六九年に DDR のテレビがそれに追隨した。古い白黒テレビはまもなく別世紀からの物のようになった。ここ四～五年は古ぼけた写真のようにスーツを着用した若者がベチコートを着用した少女の隣にハニカミながら立っていた。一九六八年のいまや長髪の若者たちは、短いスカート着用を女性を抱きながら、すり切れたソファのうゑに寝ころんでいる。そしてレコードプレーヤーのターンテーブルでは最新の歌がかかっている、ビージーズ<sup>36</sup>の「マサチューセット」、ビートルズのバラード「ヘイ・ジュード<sup>37</sup>」やローリングストーンズの「ジャンピン・ジャック・フラッシュ<sup>38</sup>」というように。ますます英語のタイトルがヒットチャートを征服していった、けれどもドイツの音楽も愛されていた。その年のトップ・ヒットはハインチェの「ママ<sup>39</sup>」だった。

#### ・生活共同体、ピレ、そして自由恋愛

愛らしいハインチェ少年への反対像を、意識して消費社会や能力主義社会に適合しようとしなない「ヒッピー」が展開した。かれらの頂上会議（サミット）は一九六九年の夏にカルフォルニアのウッドストックでおこなわれた。三日間、激しい雨の中をカナビス・シュヴァーデンでポップ音楽とプロテスト音楽を鑑賞するロックフェスティバルが平和的にベトナム戦争に抗議し、連帯感を味わいながら開催された<sup>40</sup>。一九七〇年に「ウッドストック」のドイツ版がバルト海に浮かぶフェーマルン島で開催された。ジミー・ヘンドリックス<sup>41</sup>もやってきた、これがドイツでの彼の最後の舞台だった。

パーティーだけでなく、日常生活においても男性と女性はいまや全く別の付き合い方をするようになっていた。最初の住居共同体ができた。それは「コムーネン」（生活共同体）と呼ばれ、保守的な隣人からは批判的に注視された。一九六一年にドイツ市場に出てきた

ピレ（ピル）をもって初めて、信頼できる避妊薬が存在することになる。一九六八年にはピレはいたるところで価値を認められた。それは男女の関係を決定的に変える性的上の革命の始まりだった。

それ以外に一九六八年は光線の年だった。その年に、未来のドイツの顔を形成する、社会的な政治的な出発が集結した。ここには環境運動、平和運動、そして女性運動の根源がよこたわっている、しかしまた七〇年代におけるドイツ人 RAF (Rote Armee Fraktion)<sup>42</sup> -テロリストたちの無意味な暴力行為の根もよこたわっている。

## 六 一九八九年：ジーンズと革ジャンで平和と自由を

一九八九年という年は、東ドイツにおいても西ドイツにおいても、幾千人もの若者たちが路上に出ていく年だった。一方の青年たちは自然を求めて、他方の青年たちは自由を求めて。そしてそれは政治的方向転換をもたらす。とはいえ、高揚状態の中で新しい不安も混じっていた。

ギュンター・シャボウスキー<sup>43</sup>が冷静さを失ったのは一九時だった。彼は DDR の初代国際プレス長を務めていた。インタビューは新しい旅行法Reisegesetzに関する事だった。レポーターが「全 DDR 市民に“国境通過点”Grenzübergangspunkteを越えて外国へ旅行できる可能性をもたらすその法律はいつから効力を発揮するのですか」と再度聞き返した。いらいらしてシャボウスキーはメモ用紙を取り出し「それは私の知るところでは…それはただちに、即刻に、です Das trifft nach meiner Kenntnis…ist das sofort, unverzüglich」と言ってしまった。

それはドイツ史上もっとも重要な文言だった。DDR テレビの生放送でのその記者会見の直後、それを見ていた無数の DDR 市民たちが国境通過点に押し寄せた。四時間後には DDR 国境警備兵はかれらの突進を前にして降伏しなければならなかった。そして遮断物を「押し流した」。この夜に壁は崩れた。

シャボウスキーの言葉は彼の思い違いだった。出国法Ausreisegesetzは翌朝はじめて公表される予定だった、そのために国境警備兵たちは準備ができていなかった。とはいっても、この夜に至るまでには経緯があった。すでに夏以降約二〇万人の DDR 市民がオーストリア・ハンガリー国境をこえて、ブダペストの西ドイツ大使館経由でプラハとワルシャワに逃避していた。壁崩壊前に逃避した人たちは圧倒的に若い人たちだった。

### ・出発雰囲気

また無数の人びと——とくに若者たち——は、数週間・数カ月前から継続して所謂「月曜デモ」で DDR の民主主義的な門戸開放を求めてデモ行進していた。かれらはそれで逮捕されることも稀ではなかった。「何が若者たちの間で起こっているのか、かれらがそう行動しなければならないということは、なにが劣っているのか」とライブチヒ地区監督官は当時そういう問いをしている。「未来の市民のためには何だ」。反対側で「いま数珠つなぎで、同年代の人たちに抵抗している」「非常に若い機動隊たち」に「何が起こっているのか」と、彼は呼び掛けている。

これらの若者たちは全員で平和的な革命を起こした。一九八九年十一月九日は一発の銃



も発砲されなかった。

一世代がまったく突然に新しい可能性を開いたのである。かれらは旅行できる。連邦共和国あるいは外国で勉強することができる。しかしまた、かれらは冷水にほうり投げられた。DDRではほとんど失業はなく出世コースはしっかり敷かれていた。政権が、学問してよい者とそうでない者を決定していた。一九九〇年の再統一後は、各人は突然に、自己の将来像をどのように形成するかは自分でしなければならなくなった。しかし一方で、これは多くのDDR市民にとっては克服できない隔たりのように思えた。とはいえ、多くの若者「オッシー<sup>44</sup>」はこの過渡期をうまく乗り切った。かれらの多くは、初めは肯定的な出発気分だった。九〇年の初めに「<sup>S</sup>h<sup>e</sup>l<sup>i</sup>.<sup>J</sup>u<sup>g</sup>e<sup>n</sup>d<sup>s</sup>t<sup>u</sup>d<sup>i</sup>e<sup>e</sup><sup>45</sup>」調査は、若者たちの七-%が自信をもっていると報告している。

#### ・原子力発電所と男性同性愛法<sup>46</sup>

DDRで若者たちが「Wir sind das Volk われわれが人民だ」と声をあげながら平和的民主主義的新秩序のためにデモをしている一方で、西ドイツの若者たちは八〇年代初め以降平和政治集会をするようになっていた。西ドイツの若者たちは平和キャンプ、座り込みによる封鎖、そして人間鎖を使って、超大国の軍備競争や原子力発電所の新建築に、かれらの怒りを表明した。ジーンズやすり切れた革ジャンを着用、また多くの人は黄色のステッカーをつけていた。ステッカーにはニコニコ顔の太陽と「ATOMKRAFT? NEIN DANKE. 原子力? いりません」というフレーズが書かれている。

二四歳以下の約五人にひとりの有権者は八〇年代初め<sup>Landtagswahlen</sup>の州議会選挙の時、新しく創設された『<sup>D</sup>i<sup>e</sup> <sup>G</sup>r<sup>ü</sup>n<sup>e</sup>n』(緑の党)あるいは原発反対の選挙人名簿に載っている人物に一票を投じた。一九八九年秋、ドイツの政治的・根本的変革の一方、東ドイツでの平和運動の一部は西ドイツの緑の党と統合した。公式には『<sup>B</sup>ü<sup>n</sup>d<sup>n</sup>i<sup>s</sup>90/<sup>D</sup>i<sup>e</sup> <sup>G</sup>r<sup>ü</sup>n<sup>e</sup>n』という名称である。

また<sup>Homosexualität</sup>男性同性愛を含めての社会環境の中で、八〇年代終わりには転機が到来した。成人男子間の性行為は六〇年代末以降、西ドイツにおいても東ドイツにおいてももはや犯罪ではなかった。が、それは未成年者たちに関しては様子が違っていた。連邦共和国では男性間性行為は一八歳以下では禁止だった。それに対して<sup>heterosexuelle Paare</sup>異性間の愛のカップルでは一四歳から性関係をもてた。

立法の向こう側で、両ドイツの国家において、同性愛はこの時期に比較的自由に扱われていた。人びとは飲み屋、映画館、ディスコで会合した。男性同性愛のための特別立法は「<sup>S</sup>o<sup>n</sup>d<sup>e</sup>r<sup>e</sup>s<sup>e</sup>t<sup>z</sup>g<sup>e</sup>b<sup>e</sup>b<sup>u</sup>g <sup>f</sup>ü<sup>r</sup> <sup>S</sup>c<sup>h</sup>w<sup>u</sup>l<sup>e</sup>」の一連の中で初めて撤廃された。DDRは一九八八年の初めに撤廃した。連邦ドイツの<sup>S</sup>t<sup>r</sup>a<sup>f</sup>f<sup>r</sup>e<sup>c</sup>ht刑法からは、評判のよくない「<sup>H</sup>o<sup>m</sup>o<sup>s</sup>e<sup>x</sup>u<sup>e</sup>l<sup>l</sup>e<sup>n</sup><sup>p</sup>a<sup>r</sup>a<sup>g</sup>r<sup>a</sup>f男性同性愛者のための条項」は一九九四年に初めて消えた。両ドイツ国家での立法の一様化の枠内で消えたのである。

#### ・パンク族、シンセサイダー音楽、そして不気味な病気

転換期のベルリンは今日では伝説となっている。政治的大変革の真只中において、ベルリン市の東側が権威者不在地帯になったのである。プレントラウエル・ベルクのような地

区には DDR 時代は「若い無法者」の遊び場が、創造性を発揮するための空間が十分存在した。イロコイ族カットのパンク族は、ウールのセーターに象徴される環境保全を愛する人たちと同じように、かれらの生態としてのポジションを見つける。荒廃した古い建物は占領された、古い工場ではパーティーが開かれた。そこではシンセサイダー音楽が音量たっぷりに流された。

数年後にベルリンで行われた多数のフロート（サウンド・システムを積んだトレーラー）での『ラブパレード<sup>48</sup>』は多くの若者たちをベルリン路上へと引き寄せた。しかし、世界進出をなし、性行為を経験できる若者たちの、この新しい自由の真只中に、幽霊がでてきた。エイズである。その病気は一九八一年に初めて診断され、三年後には HI ウィルスが原因と確定された。BDR も DDR もテレビ（生放送）や学校でキャンペーンを始めた。DDR では壁が市民を守ってくれる、エイズからも同じように守ってくれると信じる人もいた。あながちそれは全くの間違いでもなかった。一九九〇年までに DDR では一三三人の市民が死亡率の高いそのウィルスに感染し、二七人が転換期までにエイズで死んだ。それに対して BDR では一九九〇年までに約四万二〇〇〇人が HIV に感染した。そして五〇〇〇人以上がエイズになった。

#### ・一九八九年代の人びと

一九九三年の夏に世界エイズ会議が再統合されたベルリンで開催された時、研究者たちは悲観的だった。エイズが発見されてから二五年後、ドイツでは HIV に感染した人間は新薬のおかげで比較的良好に生きることができている。とはいえ治癒は未だに無しである。

平和運動、月曜デモ、壁崩壊を通して、若者たちは「われわれが人民だ」を示した。今日まで、一九八九年一月九日は肯定的な感情と結びついている、ドイツ史上きわめて少ないデーターの一つである。一九八九年に生まれた世代は、それまでどの若者も味わったことのない自由を享受しながら育った。そしてそれにもかかわらず——あるいはそのために——新しい挑戦の前に立っている。

### 七 二〇一四年：一体化・ネット化・危険化—探求の世代

ドイツの若者たちは今日ほど甘やかされてきたことはかつてない、そのようによくいわれる。成功、裕福——一九六八年のような反乱、しかし何に対しての反乱？—— 事実はそのようではないという通報、内部告発。

「デジタルネイティブ<sup>49</sup>」は過小評価されている。ビーフェルト大学での“ポエトリー・スラム<sup>50</sup>”の時に、心理学科の二一歳の学生ユリア・エンゲルマン<sup>51</sup>は、マイクに向かって「沢山のことをするのが好きな私の予定表は一杯ですが、決してそれをなしとげることはないでしょう」「私は自分からは何も始めないので、スマートフォンの前でただ無計画にいただけ、そして次の金曜日までじっと待つのみ。“それはあとです”が私の日常生活の基準です」と、自分で書いた原稿を朗読している。これは二〇一四年はじめてにネット・ハイベで流された。フェイスブックとツイッターで、ブログでも。またユーチューブでは六〇〇万以上がそれを見ている。

綿密に評価すれば、エンゲルマンの詩人としての質は並である、しかし見逃したチャンスについての熟考は一世代の好みにぴったりあっている。デジタルネイティヴは老人からだけでなく、同世代からも批判されている。

すでに二〇〇六年に、週刊紙『ディ・ツァイト』に、若手ジャーナリスト、フリーダ・トゥルム Frida Thurm が「今日二〇代半ばの世代は、自分を磨くことのできるものは何一つ持っていない、また抗議することを学んでいない。この世代は、いたるところで自分を合わせていかなければならない、自分を小さくしていかなければならない。この世代は調子がよい」と書いている。

#### ・ハッシュタグ<sup>52</sup>を付けての抗議、クラウドファンディング<sup>53</sup>による契約

ハッシュタグ#を付けて注目を与えながら二〇一三年に若い女性たちは彼女らの性差別の日常経験を収集した。

この世代はすべてになげやりだと勘違いをされている部分が多い。この世代は全くもってすべてどうでもいいというのではなく、抗議している。ただ違ったやり方で。

状況に合わせていると勘違いされてきたこの世代にとっては、すべてはどうでもよいというのでは全くない。この世代は違ったやり方で抗議をしているのである。アメリカの秘密情報機関 NSA 米国国家安全保障局 (National Security Agency) に大衆が監視されていると公表されて以降、若い人たちはネット上で内部告発者に対して「エドワード・スノーデン<sup>54</sup>のためには空室あり」という標識を窓に垂らすほど、絶大な好感度を表明している。ハッシュタグという叫び声の下で、一年前に一万人の人がツイッターで性差別に對抗、抗議した。ネット上で「デジタルネイティヴ」は創造的で豊かな企画を支援するクラウドファンディング・キャンペーンを支持した。大衆デモのかわりに、かれらは新技術による可能性を、ネット上の数々のアプリを、かれらの世界を形作るために利用している。

#### ・ちらっとみれば無限の可能性があるので

今日一二歳から二五歳までの若者たちは非常に楽観主義である。数年ごとにドイツの若者たちから精神状態を聞き出している「シェル・シュトゥディエ」調査の結果では、二〇一〇年には五六%が未来を肯定的にみている。若いドイツ人たちに、今までにないほど門戸は開放されている。連邦教育省の報告によれば、大学新入生数は一九九三年に比較してほぼ二倍である。しかしどの扉を通過して、かれらは行くのか？

小説『成長の苦痛』の著者でコラムニストのザラー・クットナー<sup>55</sup>は「人は何にでもなれる」と書いている。

「存分に選択が自由にできるなかで、どの可能性を選択するのか、その選択力が今日では要求される」。とはいえ、すべての若いドイツ人たちがこの「贅沢な問題」を抱えているというのではない。応募資格のある一五歳から二四歳までの全若者たちの約九%は仕事がない、あるいは教育を受けていない、そして国家からの支援を受けている。

## ・統合ヨーロッパと多重文化

今日の一〇代と二〇代は統合ヨーロッパの中で大きくなった。それゆえかれらはヨーロッパがかれらにもたらした自由を評価している。かれらは働く場所を自由に選択することができる、また複雑な手続きをしなくて旅行ができる、「交換留学制度エラスムス」は多くの若者たちにヨーロッパにおける忘れがたい時代をプレゼントしてきた。ドイツ人の若者たちの約七〇％はドイツのEU加盟を肯定的に評価している。

かれらは多重社会の中で大人になった。また、この現実をドイツはどう扱っていくかは、イギリスのような国より以上に難しいのではあるが。移民の背景をもつ約一六〇〇万の人たちがドイツで生活している。五四〇万人はここドイツで生まれた。かれらは教職についていたり、老人介護の仕事をしていたり、またドイツ連邦国防軍で働いている。

## ・自己、スマートフォン

直近の二十年間は無数のサブカルチャーや新ドイツ語「トリベス」(族)が、少年たちのあいだで発生した。G e e k s<sup>56</sup>・H i p s t e r<sup>57</sup>・E m o s<sup>58</sup>・S k a t e r<sup>59</sup>・T w i n k s<sup>59</sup>・M a n g a<sup>60</sup>・M ä d c h e n<sup>60</sup>という新語が生まれた。P u n k s<sup>61</sup>・Ö k o s<sup>62</sup>という新語は一九八〇年から今日まで生き残っている。口ひげや顔全体の髭、毛をアクセサリとする人はヒップスターに属する。

しかし、この世代は断片的で、一つのことを共通化する：ネット化と、リアルタイム交流である。スマートフォンは自分の身体の延長部分になっている。W h a t s A p p<sup>63</sup>やS n a p c h a t<sup>64</sup>また別のメッセージングを利用して、友人たちは絶えず対話準備ができていて、一四歳から一七歳までの八〇％以上は少なくとも一日一回はソーシャルネットワークにログインしている。

一二歳から一九歳までの少女たちの八六％と少年たちの九〇％は、インターネットに親しみをもっている。かれらの内それより以上の人々が自分個人の携帯をもっている。冷たいブルーのディスプレイに絶えず連結することは青少年たちに多大な影響を及ぼしている、たとえば恋愛に関して。デートアプリ Dating-Apps やティンダー Tinder あるいはグリンドル Grindr 上で、若い男女は無分別にデートの取り決めをする、そして出会いが成功すればワッツアップ上でチャットする。外面にははっきり表れない数多くの約束の中で、毎日大恋愛が生じているかどうかは、アナログ時代と同じように不確かである。とはいえ、愛に流されてしまうのが現実である。「わたしは両親には、スーパーマーケットで知り合ったというだろう」という記事がフリルト・プロフィールに書かれているのをみると、現実には多くはロマンティックではないという印象を受ける。

一四歳から一九歳の世代がドイツではインターネット使用者の先頭集団を占めている。

若い世代は情報提供や情報吸収のために社会メディアを利用するので、社会メディアは二〇一四年に入って数か月間とくに集中的に第一次世界大戦と、そこからドイツ人が学んだ教訓をネット上で公開している。世論調査機関フォルザのアンケート結果は二〇一四年初めに、一四歳から二九歳までのドイツ人の平均以上がこのテーマに大きな関心をもっていると明らかにしている。自国の青少年たちを二つの世界戦争へ送った戦争好きの国家が、

統合ヨーロッパの中でどのようにして自由な多重文化社会になったのか、かれらは知るべきであると考えている。また青少年たちはヨーロッパの歴史的平和的転機を肯定して続行する意志をしっかりと持っている。

(Endnotes)

- 1 ドイツ軍はベルギー北部からフランスに侵攻する・対フランス侵攻作戦計画シュリーフェン・プランに基づき、ベルギー領内に侵入して北部の諸都市を占領、イーペルも占領。
- 2 Die Stiftung Berliner Mauer：2008年9月17日の法律決定によって公的権利をもつ財団法人として創設。財団にはGedenkstätte Berliner Mauer ベルナウエル・シュトラッセのベルリン壁の記念場所と Erinnerungsstätte Notaufnahmelager Marienfelde 緊急受け入れ収容所マリエンフェルトの記念館も属する。
- 3 Esther Bejarano geb. Loewy (1924年-) ドイツ系ユダヤ人：アウシュヴィッツ絶滅収容所からの生還者。アウシュヴィッツの女子オーケストラで演奏した。
- 4 第一次世界大戦では、ベルギーのフランダース地方の家々、畑、野原が戦場となった。
- 5 マクデブルクの南西35キロメートルのマクデブルガー・ベルデ地域。第二次世界大戦前には航空機工場 (AGO Flugzeugwerke) が設立され、多くの労働者が働いた。連合国軍はこの工場を破壊するため10回の空襲を行った。
- 6 第一次と第二次大戦では、ここは大きな野戦病院都市になった。
- 7 カナダ人。カナダはイギリス連邦の海外自治領として参戦。同僚で旧友の戦死を悼んで書いた「In Flanders Fields フランダースの野で」は1915年の詩作。
- 8 Bernhard von Bülow (1849-1929) の1897年12月6日の国会での発言 (植民地政策との関連で発した言葉) „Wir wollen niemand in den Schatten stellen, aber wir verlangen auch unseren Platz an der Sonne.“ (我々は誰も陰に置きたくない、しかしまた我々の場所を日の当たる場所に置くことを要求する)。
- 9 第一次大戦に反対した社会主義者 Karl Liebknecht カール・リープクネヒトの言葉。1918年の大晦日にドイツ共産党を創設。1919年1月のスパルタクス団蜂起のさいに反革命義勇軍にベルリンで逮捕され「逃亡を企てたため」射殺された。
- 10 1939年3月25日。第二次世界大戦勃発は1939年9月1日 (ドイツ軍のポーランド侵入)。
- 11 ドイツ女子同盟：1930年から1945年まで存在。ナチス・ドイツがドイツに住む未成年の少女を統制するために設立した国家組織。
- 12 ヘブライ語の *Alijat Noar*、ヘブライ語で Alija は昇進：ナチス時代に可能な限り子供や青少年たちをドイツ帝国から特にパレスチナへ安全確保のために出国させようと試みたユダヤ人組織。  
[https://de.wikipedia.org/.../Kinder-\\_und\\_Jugend-Alijah](https://de.wikipedia.org/.../Kinder-_und_Jugend-Alijah)
- 13 ユダヤ人によってつくられた「Vorbereitung-Gemeinschaften 準備のための協会」
- 14 当時のドイツ大都市 (特にハンブルク・フランクフルト・ベルリン) における反対派の若者文化。彼らは14歳から21歳までの若者たちだった。
- 15 ヒトラーユーゲント内の厳しい統制生活に対抗した若者たちの自然発生的な運動としてドイツ西部で1930年代末に発生。
- 16 Hans Scholl (1918-1943)、Sophie Scholl (1921-1943)、Christoph Probst (1915-1943)
- 17 Arthur Axmann (1913-1996)：国家社会主義ドイツ労働者党青少年全国指導者。初代青少年全国指導者バルドゥール・フォン・シーラッハの後任。ヒトラーユーゲント HJ を指導。
- 18 NS-Dokumentationszentrum：ケルン市決議により、国家社会主義のために犠牲になった人々のために設立 (1979年12月13日)、ドイツ連邦共和国では最大級のナチ資料センター。
- 19 Jean Jülich (1929-2011)：第二次世界大戦中、若者たちのプロテスト運動エーレンフェルダール・グループの会員だった。そのグループは特にケルンでは国家社会主義に抵抗する運動を起こした。
- 20 Walter Urbricht (1893-1973)：1950年から1971年までドイツ社会主義統一党第一書記、1960年か



- ら1973年まで国家元首である国家評議会議長。
- 21 Yuri Gagarin (1934-1968) : ソビエト連邦の軍人、パイロット、宇宙飛行士。最終階級は大佐。1961年世界初の有人宇宙飛行としてボストーク1号に単身搭乗した。
  - 22 Adolf Eichmann (1906-1962) : ナチス政権による「ユダヤ人問題の最終的解決」に関与、指揮的役割を担った。
  - 23 Die Firma Hesselbach : 1960年のドイツのシリーズものファミリー・ドラマ。ハッセルバッハ家での日常茶飯事を扱っている。
  - 24 Peter Kraus (1933-) : 俳優かつ歌手、ミュンヘン生まれのドイツ人。
  - 25 Mädchen (少女) を指す。厳密には14歳7カ月の少女を指す。古臭くなった表現。
  - 26 Sophia Loren (1934-) : イタリア人女優。
  - 27 Audrey Hepburn (1929-1993) : アメリカ合衆国女優、イギリス人。
  - 28 Peter Alexander (1926-2011) : 俳優、オーストリア人。
  - 29 Ein Schiff wird kommen : ギリシア人作曲家 Manos Hadjidakis (1925-1994) が作った歌謡曲。
  - 30 Caterina Valente (1931-) : イタリア人歌手、ギターリスト。
  - 31 Der Lipsi : lipsiens : ラテン語で der Leipziger (ライプツィヒ人) : 1959年にDDRで流行、アメリカのロックンロールのかわりにできた4分の六タクトのリズムのダンス。平凡な二人一組のダンスだったので若者に人気がなく数年で消えた。
  - 32 Martin Luther King Jr. (1929-1968) : アメリカ合衆国のプロテスタントバプテスト派の牧師。キング牧師の名で知られ、アフリカ系アメリカ人公民権運動の指導者として活動。1964年ノーベル平和賞受賞。
  - 33 Alfred Rudi Dutschke (1940-1979) : 1960年代後半の西ドイツにおける学生運動家、社会学者、政治運動家。
  - 34 Benno Ohnesorg (1940-1967) : 1967年に西ベルリンでのデモ中にスタジー、警官のカール・ハインツ・クラスに射殺された大学生。彼の死は西ドイツの学生運動家たちに衝撃を与え、翌1968年に西ドイツ全土で燃え広がった学生運動が過激化する影響を与えた。
  - 35 Springer Konzern : Axel-Springer-Zeitungen は1999年には180以上の新聞・雑誌を発行していたが、2013年7月に Funke-Mediengruppe に売却された。Welt-系の新聞や Bild-系の新聞はすべてこれに入る。
  - 36 Bee Gees : 英国王領マン島生まれのイギリス人三人兄弟を中心に構成された男性ボーカルグループ。1963年にオーストラリアよりレコードデビュー、1973年からは米国を中心に活動。ヒット曲は「Massachusetts」「Holiday」「How Deep Is Your Love」「Stayin' Alive」等々。
  - 37 Hey Jude : 1968年8月にビートルズが発表した18枚目のオリジナル・シングル曲。
  - 38 Jumpin' Jack Flash : ローリング・ストーンズ (イギリスのロックバンド) の1968年のシングル曲。
  - 39 Heintje Simons (1955-) : オランダ人歌手。1966年にアムステルダムで「MAMA」でデビュー。1967年にドイツ・デビュー。
  - 40 Woodstock : 1969年8月15日から17日の3日間ニューヨーク州サリバン郡ベセルで開かれたロックを中心とした大規模な野外コンサート。
  - 41 Jimi Hendrix (1942-1970) : アメリカ合衆国のミュージシャン、シンガーソングライター。
  - 42 赤軍派 : 第二次世界大戦後のドイツ (旧西ドイツ) におけるもっとも活動的な極左の民兵組織、テロ組織。1968年設立1996年廃止。
  - 43 Günter Schabowski : 元東ドイツのドイツ社会主義統一党 (SED) の政治家、ジャーナリスト。ベルリンの壁崩壊のきっかけを作った人物。
  - 44 再統一後旧東独国民は「オッシー Ossi」旧西独国民は「ヴェッシー Wessi」と呼ばれた。
  - 45 石油コンツェルン・シェルによって1953年から編集されている「若者の、雇用・評価・慣習・社会行動の、経験による調査」を指す。
  - 46 ドイツ刑法典175条 : 男性同性愛を禁止するドイツ刑法典の規定。ドイツ帝国成立後の1871年5月15日に制定、ドイツ再統一後の1994年3月10日まで施行。

- 47 2014年現在、ドイツ連邦議会で63議席を持つ4番目に大きい政党。
- 48 ベルリン市内の“6月17日通り”を往来する多数のフロートを中心に参加者が踊り、練り歩く、毎年7月に行われる世界最大規模級テクノ・ミュージックのフェスティバル（1989年-2010年）だったが、多数の死傷者を出し中止。パレードは政治デモとして許可されていたが、政治的主張はあまりなかった。
- 49 “Digital Natives, Digital Immigrants”(2001) を著作した Marc Prensky がその本の中で定義した呼称。IT時代に生まれた世代をデジタルネイティブ、IT普及以前に生まれ、それを身につけようとしている世代をデジタルイミгранトと呼んだ。
- 50 制限時間内に詩を朗読してその内容とパフォーマンスの優劣を競うもの。原則として自作の詩を朗読。詩の朗読を競う場は古代からあるが、ポエトリー・スラムは1980年代初頭にシカゴのクラブ Get Me High Lounge で Marc Smith が始めた。
- 51 Julia Engelmann (1992年-) : プレーメン生まれ、ドイツ人女優で語り部。
- 52 Hashtag : # 記号と、半角英数字で構成される文字列のこと（ツイッター上）。発言内に「#」を付けて投稿すれば、その発言が検索画面などで一覧できるようになる。
- 53 Crowdfunding（英語）：不特定多数の人が通常インターネット経由で他の人々や組織に財源の提供や協力などを行うこと。Crowd（群衆）と funding（資金調達）を組み合わせた造語。ソーシャルファンディングともいう。
- 54 Edward Joseph Snowden (1983年-) : アメリカ合衆国の情報工学者。中央情報局（CIA）及び国家安全保障局（NSA）の局員として、アメリカ政府による情報収集活動に関わった。2013年6月に香港でアメリカ国家安全保障局（NSA）による個人情報収集の手口を告発。それにより米司法当局から逮捕命令が出されたが、ロシア移民局から期限付きの滞在許可証が発給され現在ロシアに滞在中。 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
- 55 Sarah Kuttner (1979-) : 不安定な人たちの世代についての小説『Wachstumuschmerz』（成長の苦痛）を2011年に著作。
- 56 熱中する人、書齋学者という意味の greek（英語）からで科学的テーマや架空テーマへの興味によって傑出する人物を指す。一般的にはコンピューターや幻想世界に熱中する人。
- 57 Hipster（英語）からで、新しがり屋。
- 58 Emotional Hardcore（英語）から：本来のパンク・ロックのロックンロール色を排し、より暴力性やアグレッションを抽出し派生したジャンル、単にハードコアと呼ばれることも多いハードコアパンク Hardcore-Punk のサブジャンル。たとえば絶望や悲しみという感情の強調、同じように社会的テーマ、政治的テーマ、ニンゲン間のテーマによる感情強調を体現する人。2000年以降若者の流行としてエモ音楽を通して交流する若者文化の流行現象。 <https://en.wikipedia.org/wiki/Emo>
- 59 若くてスリムで体毛や髭などが薄いか、ほとんどない男性を指す。
- 60 漫画に登場する少女の衣装・ヘアスタイルをそのまま真似て変身する少女。
- 61 1970年代後半にイギリスで起こったパンク・ロックの音楽の流れをくむ若者たちの反体制的な風俗現象。
- 62 ドイツ語 öko- から：環境保護の人。
- 63 アメリカの WhatsApp 社が提供する、リアルタイムでメッセージ交換ができるスマートフォン向けインスタントメッセージングアプリケーション。2009年5月4日に提供開始。
- 64 スマートフォン向けの写真共有（英語版）アプリケーション。